

タイガース随想

吉 田 義 男（遊撃手）・村 山 実（投手）



（阪神タイガース優勝パレード／神戸っ子ファンにもみくちゅにされて兵庫県庁前大通りをパレード）

ぼくは

神戸が大好きだ！

吉田義男

夏はアスファルトに焼けつくような太陽。じんじんと指先まで凍えてしまうような底冷えのする冬。奥行きのある古い家、いまはけい光燈のおかげで明るくなったがそれでもやはり暗い。そんな京都に育ったせいか、活動的なスポーツをやっているに似合わず、静かな雰囲気が好きである。長い習慣が自然と生活を支配してしまうのかも知れない。西に東にと旅から旅の明け暮れだが、どうしても静かな方向に足が向きがちになるようだ。

神戸はそういった意味からも気に入った街である。もともと三方を山にかこまれた京都と港神戸では共通点は「静かだ」という以外にあまり見出だせない。だがぶらりとあてもなく出かけるときは、騒々しい大阪よりも神戸に足が向く。ことは考えるところがあった。車を売り払ったがそれまでは交通事情の悪い大阪など見向きもしないほどだった。神戸の好きな理由はそればかりではない。新らし



山小屋

三宮生田新道仲通

TEL 3-1811



世界の洋酒の店

A
B
U
ハ
チ

元町二丁目
TEL ③ 2798



All New Fur Full Fashion

ゴージャスな毛皮の装いは62'のトップモード

毛皮の店

ウエダ

元町2丁目 ③ 0686

い魚がどしどし食べられることもある。京都という街は山国の関係で魚といえば乾物か鮮度のにぶいものばかり。刺身とか生魚が好物のほくにとってこれはこたえられない。すし屋ののれんをくぐってみてもピチピチと生きのいいエビみるからに引きしまった感じのしる身をみてみると、中央市場の活況が眼の前にみえるよううれしくなってしまう。下戸のほくでもつい盃を手にしたくなるくらいだ。魚はやはりとれとれのものもいい



生き生きした舌ざわりを味わっていると疲れも吹きとぶ気持ちだ。

材料にとり立てて注文はない。

とにかく生きさえなければもうそれだけで胃袋が泣いているみたいだ。威勢のいい板前さんにさっとなぎやかな手付きで握って出されるともう「うんこれはいかす」口をもぐもぐさせながら思わずこんな声が出てしまう。ちょうど呼吸のピツタリ合ったけん制プレーと同じようなものだ。板前さんとほくとの間はツツ・カーカーであ

る。それに板前さんが不思議と阪神ファンが多いのも楽しい。話をしていると別にこちらに調子を合わせている風にも思えない。藤村さんのところからのファンだという人がずい分という。ひんやりとしたすしを舌の上にのせながら「優勝っていいもんだな」静かに喜びを二度味わったようなものだ。「なにしろ15年ぶりですからね優勝決定の日にはウチの連中はテレビのそばにかじりつきですよ。本当によかったですね」

神戸の人は家族的だ。いろいろの地方から出てくる人が多いと聞いているが、知らず知らずのうちに故郷以上に思いこんでしまうのだらう。たしかにそんな雰囲気神戸にある。港の魔力というのだろうか。それとも母性的な海がそういういった環境を育むのだろうか。

いつの間にかやら生つ粋の神戸っ子だという錯覚にとらわれてくるのだ。京都に住んでいるころ、友人が「京都ってここは封鎖的なところやな。三年住まないと近所つき合いもしてくれないそうやで……」といっているのを聞いたことがあるが、たいした違いだ。暗いじめじめとした古い家と、バラックでもないカラツと太陽の当たる神戸の家、同なじ静かな街でも白と黒の相違が生まれてくるのだろうか。

早いもので阪神沿線に住みつい

てからももう十年になった。いまでは京都に帰るのも年に四、五回くらい。すっかりこちらの生活が板についてきた。京都は京都でそれなりに良さがあるが、いまでは魚のうまい方が住みやすい。それに神戸肉といえば全国でも有名、いや世界的だともいう。どうも食べ物のお話ばかりだが、味覚の秋のせいかな。そやけど松茸なら京都が本場どっせ。

(遊撃手)

優勝の陰に

亡き母の愛情

村山 実

十五年ぶりに阪神は優勝した。私もその一員として先日行なわれたパレードにオープンカーに乗る喜びを味わった。甲子園を出発して神戸に向かう沿道には人また人で、神戸にもこんなにたくさん阪神ファンがいたのかと驚いたり喜んだり。延々五時間にわたるパレードもさほど疲れは感じなかったそれというのもう一つの喜びがあったからだ。

もともと神戸生まれの神戸育ちそれだけに神戸は人一倍愛着の深

かいところだが、感慨ひとしおだったのは、その神戸の北野墓地に優さしかった母が静かに眠っているからだ。オープン・カーでファンの人垣にもまれるうちにもふと我れを忘れる瞬間があったものだ。優しかった母の思い出。すでに一児の父となったほくに、なんとセンチなやつだと思う人があるかも知れないが、それはそれだほくにはやはり母が最高になつかしい。

そもそも現在曲がりなりにも野球界に身を投じて働ける動機は母の並々ならぬ愛情からだ。高校に入学後私は野球にとりつかれたかのように毎日、毎日ボールばかりをおっていた。そんな私をみて父はよく「野球ばかりしてないで少しは勉強しろよ」と注意したものである。母はただひとりかばってくれたのだ。

当時は戦後の混乱がまだおさまらず、食糧事情も現在とは雲泥の相違だった。食べきりの少年期、そのうえ野球の練習で家に帰るころはお腹にもうベコベコ。動くのもいやになるようなことも度々だったところ。母は帰宅を待ちわびて必ず事前に食べ物を支度してしてくれたのだ。食事時分をはずしておそくかえってくる私の前に坐って自分はないにも食べないで、つき合ってくれるその姿を暖かい

白い湯気ごしに見出だしたとき、ふと涙ぐむ思いだった。末っ子だけに余計に可愛かったのかも知れない。母の苦勞をよそに私は伸び伸びと野球生活を楽しみ、伸び伸びと大きくなっていった。

高校時代は無名校にしか過ぎず、勝利の喜びを味わう機会もありなかったが、それでも母は絶えず励ましつづけた。「何クソ」と人一倍負けずぎらいになったのも、こうした暖いカゲの援助があったからこそだといまでもなつか



しく思い出す。

その私にとって一番大きなショックは大学二年のとき、生命にもかえがたい母を失なってしまったことだ。しばらくは食事ものごを通らなかつたほどだった。

苦しい心境とは別に野球はめきめきとうまくなった。その年、神宮で行なわれた全国大学選手権大会にエースとして投げつづけ関大初優勝に貢献出来たのだ。

もっともいいことばかりはなかつたその翌年から肩を痛め、学生

生活の最後は不遇のうちに過ぎた。ちやほやしていた周囲も使えないと見ると無情なものだった。潮がひくときのようにさっと消えていく人が多かった。社会生活のむづかしさを実際に教えられたような気がしたものだ。この失意のどん底で心の支えになってくれたのがまた亡き母だった。

「どんなに苦しいことがあっても決してくじけてはいけません。最後までやり抜くのです」練習らしい練習もやれないで帰途につく後姿にそうささやきかけては励ましつづけてくれた。「そうだ肩の痛みなんかなんだ。気力ではねかえてみせるぞ」その後肩にいいという薬、療法あらゆるものに飛びついて再びプレートに立つ日を夢みて頑張ったおかげで、四年の秋にはどうにか投げられるようになり縁あって阪神に入団した。

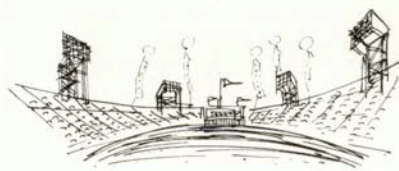
「藤村さんのような猛虎魂」が大好きだったからだ。その阪神がことし十五年ぶりに優勝することが出来た。そして最高殊勲選手に選ばれた身にあまる光栄にも浴した。それでいてなにか物足りない気が持かくせないのは、一緒に喜んでくれるはずの母の姿がみえないからだ。

(投手)

立派だった

今年のタイガース

合田 督



ことしの阪神タイガースは、ほんとうによくやった。眠れる獅子が十五年ぶりに優勝——期待の日本シリーズでの本拠地甲子園で二連勝という好調なスタートを切ったときは、「日本一」まちがいないしと我がごとのように喜んだのは私だけではあるまい。「今年こそは、今年こそは……」と眠れる獅子の奮起を待っていた阪神ファンなら誰しも思ったことに違いない。惜しくも「日本一」のタイトルは善戦むなしゆうして消え去ったが、その健闘は私たちファンを満足させてくれた。

それほど今年の阪神は立派だった。各選手の心意気には、まさにタイガーの名に恥じないすさまじ

いファイトが感じられた。

最高殊勲選手に選ばれた村山投手——彼は本当に一生懸命に投げていた。全く一途に投けているという印象を受けた。もちろん、野球は個人プレーで勝てるものではない。チーム全体の力が一つになってこそ始めて「優勝」の栄冠をかちとることができるわけだが——それにしても主将、吉田遊撃手の活躍はすばらしかった。十年選手としてのカン祿を大いに発揮した日本シリーズでの再三にわたるファインプレーとあの打撃成績、ちっさくてもよく頑張っていました。日本シリーズ第六戦にはホームランを打ち対スコアにまでもっていった吉田選手の活躍に阪神、東映両ファンは敵味方のワクを越え限らない賞賛の言葉と拍手を送っていました。

私はこの吉田選手には、親身になって応援している。——胸のすくようなプレーもさることながら背格好が私に似ているという他愛もない理由からだ——私自身は真剣そのもの。「牛若丸」というニック・ネームがよい。キビキビして「ここと思えば、またあちら」の歌の通り、右に左にとあさやかに飛びまわり、あわやノと思われる難球を無造作にさばく吉田選手のプレーに私は心からの声援を惜しまない。

私はヒネクレているのか？ 一番強くて威張っているタイプは好かない。牛若丸の義経が好きだ、相撲では柏戸が好きだったし、野球は阪神と南海——とどちらかといえば時々、負けて泣きペンをかくといったほうが我が身につきまされて、無茶苦茶に肩を入れてしまう私が肩入れたとてどうにもならないことは解っているがやっぱりヒイキには勝ってもらいたい。阪神よ来年こそは「日本一」の栄冠を！ 野球といえど、私はこれまた気違いじみた母校、早稲田ファンである。だから私の先輩の陰山、一年後輩の木村保のいる南海が好きで、それ以上に元早大監督森さんが社長で三原が監督、森徹のいる大洋が文句なしに大好きだった「だった」というのは、そんな大洋ファンの私も、いつの間にか、好きな女性の阪神狂に影響（？）されて、また同じ事務所の「瘋癲のふーさん」とアダ名される位、阪神のこととなると狂ってしまふFさんに突き上げられて（？）ついに阪神狂になってしまったわけだ。阪神タイガースは地元のチームだし、来年も、そして再来年もいやにれからもずーっと「眠れる獅子」でなく今年のような「猛虎」として頑張ってもらいたいものだ。はり切れタイガースよ！！

(三 英 物 産 社 長
神戸青年会議所会員)

贈って喜ばれ

もらって重宝

菊秀の家庭用品

- 御料理庖丁
- 裁縫鋏
- 大工道具と工具
- SOLINGEN製鋏及びナイフ
- ステンレス食器
- 魔法瓶
- 錠及カーテンレール
- 石油ストーブ
- 世界の電気剃刃・安全剃刃

神戸・元町2丁目 山側

TEL KOBE ③0276 ③90892



コスチュームアクセサリーの店

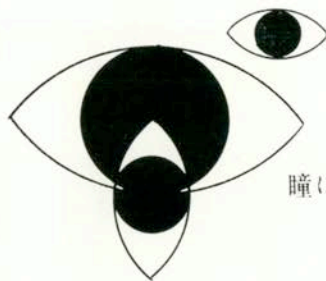
芸 がい 夢
む

神戸店・トアロード ③ 2293
大阪店・心斎橋ロビー
(211) 1044

新古美術品

播 新

③ 神戸市元町三丁目
2 5
1 6



瞳に美しさを保つ
スポーツに
美容に
現代の科学が生んだ
コンタクトレンズ

国際コンタクトレンズ研究所

神戸市葺合区御幸通八丁目九ノ一(三宮駅前)
神戸国際会館内 TEL(22)8161・8361



東京洋品の店
千 秋 堂
元町4丁目④6959

クラシック調の
スポーツウェア
ニットウェア



男子洋品の店

神戸屋

元町2・TEL(3)2589



あらゆる電器製品の店

元 町 電 機

暖かい冬に暖房スリッパ

元町6 ④3701~5

YE AULD SHIRT SHOPPE



よろず御襯衣仕立處

神戸シャツ

神戸大丸前 TEL ③2168



ハイセンスの紳士服で
最高のオシャレを

元町4丁目

三恵洋服店

TEL ④7290



みんなに贈って喜ばれる
風味豊かなカステラ! /

<元町6丁目>

長崎堂本店

本店7-4402元町4-4130

神戸新聞会館秀品店・阪急



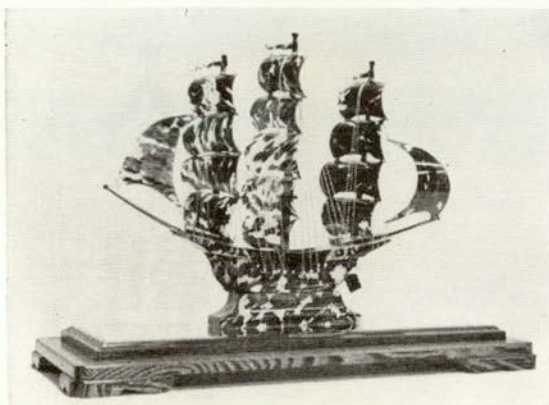
Toilet articles & accessory

化粧品

アクセサリ

絹屋

西店・三宮柳屋 3-5778
本店・甲南本通 85-0250



センスあふれる

べつ甲の専門店

元町一丁目

太田鼈甲店

TEL ③ 6195

新しいセンス、フランス調の
ヘヤースタイル

美容室

あきら

西野 明

御電話の御予約いたしております

三宮本通り TEL ③4461・6458

KOBE

SUGIYA

ハンカチと下着の店

トア・ロード TEL ③3436



ロマンスの秋

近づいた

楽しい冬に

スギヤの

プレゼント...



高級紳士服専門店

神戸テーラー

オーダーメイド・イメージ

オーダー・レディメイド

生田区北長狭通2

(省線高架通50) ③2817

天罰

陳 舜 臣

え・松 本 宏



「なんや、こんな夜中に。金でも返しにきたんか？」
高利貸の小笠原は、ヒマラヤ杉の八郎が来たのを見て、
言った。

「金は返したるで」八郎は答えた。「そやけど、おっ
さん、ようも人まえて恥をかかせてくれたな。そのお礼
もせんならん」

「人まえて恥をかかせたやて？」

「みんなのまえて、金返せ、言うたやろ？」

「人に金借りといて、期日がきてもかやせへん。こっ
ちも商売や。催促もせんならん」

「わいをなめとんのか？」

長身の八郎は身をかがめて、目をむいた。左目の下に
大きな傷あとがあるので、すぐみは利きすぎるほどであ
る。

小笠原はにらみ返したが、ふと不安になった。相手の
目がいつもとちがっている。なにか、ただならぬ光を帯

びていたのだ。

「まあ、落ち着けや」八郎は言って、背をのばした。

「なんぼ借りとったかいな？」

「元利あわせて、二百三十二万円や」小笠原の声は、
不安のためか、かすれていた。不吉な予感が彼の胸をか
すめた。

「返したる。会う度びにブウブウ言われたらかなわ
ん」

八郎はポケットに手を入れて、新聞包みを取り出した。

「借用証返してんか」

「金勘定して、数が合うてたら返すがな」

「借用証出さんと、わい、金渡さんぞ」

八郎の語気に気押されて、小笠原は手提金庫をもち出
して、「あんたの借用証はこの中にある。勘定すんだら
確かに返すわいな。鍵もちゃんとここに置いてくがな」

「ほんなら、勘定してみいノ」

八郎は新聞紙包みを投げた。小笠原がそれに手をのばしたとき、八郎はベルトにはさんで上衣にかくしていた棍棒を、そと取り出した。小笠原は包みをあけた。なかも紙幣の形に切った新聞紙の束であった。

「なんやこれ！」小笠原が憤然と見上げた瞬間、八郎の手にあった棍棒が、高利貸の脳天めがけて、うなりを生じてふりおろされた。

六十をすぎたといえ、小笠原は岩乗な体の持主だった。しかも、顔をあげたところなので、脳天と思つたところは、額になっていた。

「う、う……」額を朱に染めて、小笠原は呻いた。

「しっこいおっさんや。一発でお陀仏せんとは。よっしゃ、もう一発やったら」

八郎は棍棒にツバを吹つけた。

「ひ、と、ご、ろ、し……」

小笠原は絶叫したつもりだったが、舌がもつれて、蚊の鳴くような声しか出なかった。

「おっさんよ、息のあるうちにようきいとか。わいはな、用心に用心してこへ来たんや。誰にも見られとらへんあとで警察にしらべられたかて、わいはいまごろ親友の家で酔いつぶれてることになってるんや。な、あんまり苦しめるのも可哀そうやからもう一発やつた。こんど生まれかわったら、あんまり因業なマネするんやないで」

八郎の棍棒は、こんどは狙いたがわず、脳天にうちおろされた。そのあとで、八郎は畳のうへの鍵をひろって手提金庫の鍵穴にさしこもうとした。

「あ、やりやがったな」八郎は唇をかんだ。

鍵は鍵穴よりもずっと大きいのだ。小笠原は本能的に危険を感じたらしい。万一のときも、相手に一杯くわせてやろうという、しぶとい根性だったのだ。

「しやらくさいことさらしやがった」

八郎は手提金庫をとりあげ、死体のほうを見やって、薄笑いをうかべた。書類や紙幣しかはいっていないので

そんなに重くはない。このまま頂戴したほうがよい。金庫の跡始末は、またあとでゆっくり考えればいいのだ。金庫の鍵で、八郎がすこし動揺したのはたしかだ。すくに対策を考え出したので、自分では落着いたつもりだった。

が、やはり動揺は尾を曳いていたのだ。高利貸の家から、あまりにも無造作に表戸をあけて、そとへ出た。自分の落着きぶりを、自分に示そうとしたからかもしれない。

本来なら、細目に戸をあけ、あたりに人がいないのをたしかめてから外へ出るのが定石である。それを怠ってしまったのだ。

なんということだろう。ちようど隣家からも一人の男が外へ出たところだった。その男は堂々たる体格をしていた。ヒマラヤ杉の異名のある八郎も背は高いが、その男は同じくらい高いうえ、もっと逞しい体つきをしていた。ぎよろりと八郎を見たその男の目は、不気味といっているほど妖しく光った。

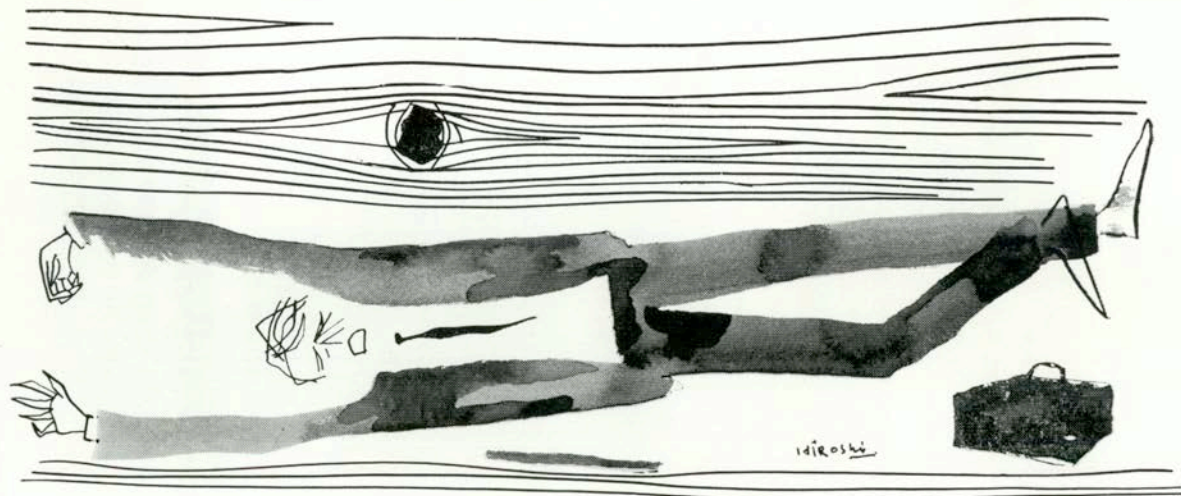
「しまった！」八郎は心のなかで叫んだ。

小笠原家の門燈はあかるかった。そして、彼は左目の下に、決定的な目じるしとなる傷あとがある。アリバイ工作はしてきたが、目撃があらわれては、なんにもならない。

半丁ほど行ったところは崖になっていた。崖のそばに電柱があつて、防犯燈がとりつけてある。そこまでは一本道だ。八郎はその電柱のところまで行った。そして手提金庫を地面におろし、電柱にむかって、小用を足す恰好をしながら、相手が近づくの待った。

相手をやりすごして、うしろから一撃。それで、目撃者をこの世から消せるのである。相手から見えないほうの手に、例の棍棒をにぎりしめて、彼は待った。

……相手が八郎のうしろを通った。一步、二步、そして、八郎はふりかえろうとした。が、彼はその場に崩れるように倒れてしまった。相手の男が、通りざま、八郎



に当て身をくわせたのである。

くだんの男は「ヒヒヒ」と気味のわるい笑い声をもらした。目の光も尋常ではない。

八郎の殺意をとっさに感じて、機先を制したのであらうか？ それにしては早すぎた。棍棒を握った八郎の手はまだすこしも拳がっていないかったし、彼の体も、まともに相手のほうへむきをかえてはいなかった。

「ヒヒヒ……」その男は泣くような笑い声をたてて立ち去った。しばらくして、彼の姿は、崖のうえにあらわれた。彼はそのへんに行きかかっている大きな岩を両手でもちあげ、狙いをさだめて、崖下におとした。崖下には八郎が気絶して、あおむけに横たわっている。岩は八郎のうえに落下して、胸から腹にかけての部分をおし潰した。

「ヒヒヒ……おれがあそここの家から出るのを見たからや。こいつが死んだら、もう誰にもわからんやろ。ヒヒヒ……春坊ノカタキはうったぞ、安心しィや」

そう言って、男はゆっくり歩きだした。

崖下で岩につぶされている男は、翌朝になって発見された。身許はすぐにわかった。ヒマラヤ杉の八郎という悪名高いやくざである。

ところが半丁も離れていない高利貸の小笠原家で、主人が鈍器で頭を割られて死んでいた。そして、その隣りで一人暮しをしている鳥羽というドライヴきちがいの後家さんも、やはり家の中で首をしめられて死んでいた。「ヒマラヤ杉の八郎が、立てつづけに二軒、押しこみ強盗にはいりよったんです」

G 刑事は自信をもって断言した。

八郎の死体のそばには、棍棒と小笠原家の手提金庫があったのである。

「後家さんのほうは、しかし棍棒じゃなく、しめ殺されているが？」と署長がきいた。

「女やから棍棒を使うまでもないと思ったんですよ」G 刑事は答えた。

「鳥羽家ではなにも盗られていないが?」

「あの後家さんは、金をもつてないんです。自動車きちがいで、半年ほどまえに子供をひき殺して……ほら、あの警察で柔道を教えてた岡田はんの坊ちゃんを……」

「ああ、おぼえてる。春夫君だったな」

「あれは示談で解決したんですけど、後家さん、あり金ぜんぶ慰謝料に払ったそうです。残ってるのは自動車一台だけ……」

「なるほど。裏に自動車置いてあったね。車があるから金があると思って、押し込んだが、金はない。さわぐ女をしめ殺したが、くたびれもうけでシャクにさわって、ついでに隣りの高利貸を襲ったというわけか」

「高利貸から金庫をせしめたが、崖下を通るとき岩が落ちてきて……天罰ですな」

「上から岩が落ちてきたら、頭にあたるはずじゃないか?どうして胸や腹に?」

「岩の落下に気がついて、あわててよけようとして足をすべらしたんでしよう。ひっくり返ったところへ、岩が……」

「そうだろうな。天罰か」署長は呟いた。

「こないうまいこと天罰があたるやなんて、珍しいですな」G刑事も合腿をうった。

「可哀そうなのはあの後家さんや。わるい噂一つなかったのに。……子供をひき殺した罰が当たったのかな?」

「あれも天罰ですか?」

犯人が奇禍に遭って死んだので、むろん捜査を要する事件とはならなかった。

一と月ほどして、須磨区のある交番のまえで、一人の大男がわめいていた。

「あの女はおれが殺したんやぞ、春坊のカタキをうつたんや。おれが、あいつをこの手でしめ殺したんやぞ。ウソや思たらあそこで小便しとった男にきいてみイノ」すこし首をかしげて、「あいつも、死んでしまいいよ」

「たんなかな?」

交番のなかには、二人の巡査がいた。

「岡田はんは、春坊が死んでから、ちよつと気がへんになったけど、最近、それがよけいひどなったやないか?」

「そやな」もう一人の巡査は言った。「可哀そうに。もう病院へ入れたほうがええな」

年をとったほうの巡査がそとへ出た。

大男はまだわめきつづけていた。

「おれが殺したんやぞ、なんでおれをつかまえへんのや?」

「いいから、いいから」巡査は狂った柔道師範の肩をたいて、「あんまり興奮しなさんな。とにかく私がついて行ってあげる」

「刑務所か?」

柔道家は胸をはって、たずねた。「ちがいますが、先生。お宅までね」
(この項おわり)

秋の小豆島

小磯良平

《表紙のことば》

小豆島には画友の古家新さんのアトリエがある。古家氏が選んだ場所は、土庄・坂手の間にある、西浦の内海(うちのみ)というところになる。そこは入江になっていて、オリブが美しいところである。この古家氏の隣に梅田画廊が家を持っていて、そこに滞在して画を描いた。秋の小豆島は瀟洒なたたづまいがよい画題になる。私は好きなものだから時々出掛る、流石に海辺だから新鮮な魚がふんだんにあるのも楽しみの一つだ。ちやうど古家氏のアトリエに高松からの帰途だといわれて滝川清一氏ご夫妻が立寄られ、話が神戸のことではづみ愉快な一刻をもつことが出来た。関西汽船で四時間で小豆島に着く、表紙は舞子丸の船上でスケッチしたもの、秋の船旅は快適そのものであった。



深見 隆

戦前の神戸は、東の横濱、西の長崎と並んで、西洋に面する日本の窓口、異国情緒にあふれた港町であった。だが、その神戸は今とは、十重二十重の商業に覆われ、「時代化」した町の印象は、かつての港町という感じを失っている。

都市のデザイン

季節風

神戸は、東の横濱、西の長崎と並んで、西洋に面する日本の窓口、異国情緒にあふれた港町であった。だが、その神戸は今とは、十重二十重の商業に覆われ、「時代化」した町の印象は、かつての港町という感じを失っている。

「神戸の港にナイガラ式の照明をあてて、その光を海に反射させる」という計画は、山崎の構想である。だが、その計画は、神戸の港にナイガラ式の照明をあてて、その光を海に反射させるという計画は、山崎の構想である。

今、神戸の港にナイガラ式の照明をあてて、その光を海に反射させるという計画は、山崎の構想である。だが、その計画は、神戸の港にナイガラ式の照明をあてて、その光を海に反射させるという計画は、山崎の構想である。

編集後記



☆今月は花時計のかわりに、ちょうど、みなと祭の日、朝日新聞十月二十二日朝刊第四頁(全国版)の季節風の欄に「月刊神戸っ子」をご紹介下さいました。神戸っ子の歩みに大きな励ましともなり、編集員一同感激しています。特に右欄に再録させていただきまし。なお月刊神戸っ子発行の都度、朝日新聞(神戸版)で内容のつ紹介

をいただいています。誌上ですが重ねて感謝いたします。
☆神戸には縁の深い松方コレクションが開催され、「神戸っ子」の話題をあつめています。今月は文化の月です、そこで音楽・美術・演劇界の最高の評論家スタッフで神戸市の宮崎助役にもご出席いただいて、神戸の文化をどう創るかという問題で御意見を伺いました。文化不毛の地などと云われる奇妙なニックネームを早く返上するためにも「神戸っ子」は頑張りますよう。
☆鴨居玲氏が全快され、女性アチラこちらを復活して執筆いただきます。今月号はうまいもの巡礼・神戸だからえがく夢は都合で休載させていただきました。(小泉)

月刊「神戸っ子」案内

☆月刊「神戸っ子」を毎月御購読下さいます方、神戸を離れているお友達にプレゼントなさりたい方は編集室宛にお申込下さい。

6ヶ月分・500円(送料共)
1ヶ月分 1000円

☆誌上紹介の各神戸の銘店にはお客様へのサービス品として「神戸っ子」がおかれています。
☆「神戸っ子」をお求めのさいは左記の本屋さんでどうぞ。

海文堂・元町3丁目
宝文館・元町5丁目
漢口堂・京町筋角
日東館・大丸前
流泉書房・センター街
文洋堂・国際会館
合田書店・大正筋商店街

月刊「神戸っ子」No. 20
発行/S 37・11・1
編集・発行/小泉康夫
発行所・月刊「神戸っ子」編集室
神戸市葺合区御幸通8丁目9ノ1

TEL 7037・頒価70円
国際会館一階

山若森石宮松古福中直永田田遠塩白飯古後久小小木嘉川金大小曾岡岡牛櫻石青安
 神戶吉生会議所 山口杉崎崎崎地井川富西本井中村川崎川本林森保林磯下納西井淵根部崎尾並野木倍
 弘慧三雄二男夫美勝郎七郎之介二郎源勝榮二喜太其芳良正元ツ真伊真吉正成重正
 引慧三雄二男夫美勝郎七郎之介二郎源勝榮二喜太其芳良正元ツ真伊真吉正成重正

発行に色々と
 お世話いただいた方々

- 本誌広告により広告主へ直接御注文やお問合せの際は「神戸っ子」広告による旨お書き添え下さい。
- 広告主の住所不明な時は「神戸っ子」編集室にお問合せ下さい。お取次いたします。
- 「神戸っ子」に広告掲載御希望の向きは「神戸っ子」営業部宛御照会下さい。「神戸っ子」編集室



秀品店 友の会 発足

あなたと秀品店を結ぶ「秀品店友の会」が
神戸新聞会館ボーリングセンターの開場と
同時に発足することになりました…

●お買い上げ300円以上のお客さまに
「秀品店友の会」会員証とシールをお渡しいたします

7 COLLECTION

シールは7色あります この色が揃えば景品を進呈

●神戸の街々は冬の支度を初めました

ここ三宮秀品店もおしゃれの冬にふさわしく

紳士服・婦人服・洋品雑貨・靴・編物・手芸・カメラ・時計
装身具・真珠・化粧品・趣味の人形・切手・玩具・レコード
・万年筆・メガネ・コンタクトレンズ・印刷・ゴルフ用具
和、洋菓子・舶来食料品などエキゾチックなセンスある優秀
品をとりそろえました。



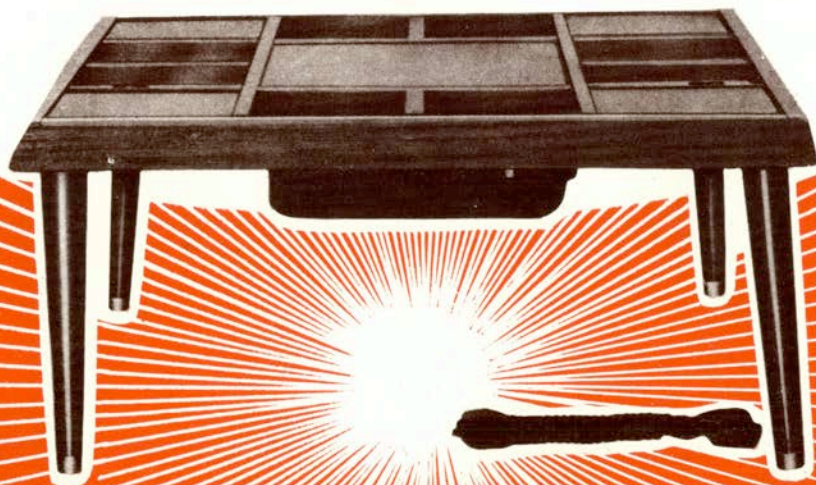
神戸唯一の高級専門大店

秀品店

国鉄三宮駅前
神戸新聞会館 1階
AM10時～PM8時

7/11/71

暖かい、暖かい、赤外線！



'63 年型

赤外線健康コタツ

太陽の暖かさ……
赤い光でシンから
ポカポカ！

300ワットと80ワットに自動調整する独創の赤外線ダブルヒーター。

赤い光がヒフ深く通って血行をさかんにし、身体のシンから暖めますから、健康と美容にも役立ちます。

ナショナルがトップをきって3年目、家庭医療器具として特に認められたホームコタツです。

しかもサーモと温度ヒューズの2重安全設計。

ヤグラは掛ふとんを傷めない傾斜形です。

赤外線健康コタツ

DW-300L2300W

現金正価 四、七五〇円

月賦定価 四、八九〇円

(一時間の電気料金・約一円三九銭)

松下電器産業株式会社